神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

My thirty-four years in KCUFS

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-11-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐藤, 晴彦 メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/421

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

神戸外大の34年間

佐　藤　晴　彦

私は1964年，神戸市外国語大学中国学科に入学し，学部で４年，修士で２年学んだ。1982年には教員として外大に赴任し，爾来28年間教鞭を執った。学生として在籍した時期と教員として教鞭を執った年数を合計すれば34年間，外大で過ごしたことになる。言うなれば，これまでの人生の大半を神戸外大と関わりをもって過ごしたわけである。

私は神戸外大に入学し，中国語と出会ったことにより，その後の私の人生が決定づけられたと言っても過言ではないと思う。中でも，坂本一郎先生，太田辰夫先生，長田夏樹先生という，それぞれが個性の塊というお三人の先生に出会えたことが，どれほど幸運であったか，歳を取れば取るほど身にしみて覚えるようになってきた。退官に際し，このお三人の先生方のことを書こうと思ったが，紙幅の都合もあり，また坂本一郎先生，長田夏樹先生については別に書く機会を与えられたので，そちらにゆずり，ここでは太田辰夫先生のことを思い出すままに書きしるし，同時に個人的なことも綴っておきたい。

出会い

太田辰夫先生には二年生の頃から教えていただいた。確か最初に取り上げられたのは『巴金自伝』で，香港のリプリント版であったと記憶する。ただ，初対面の際の先生の印象は決してよくなかった。テキストを講読しつつ，「難しいね，困っちゃったね，分からないんだよ。」と言いながら，マイ

ペースで授業を進められる。二年になりたての「若造」であった私は，「分からないのだったら，もっと勉強してこいよ。」と真剣に思ったものだ。太田辰夫先生がそんなに偉い先生だとはつゆ知らなかったので，そう思ったのであるが，今にして思えば汗顔の至りである。

太田先生の授業が始まってまもなく，一度質問しようと思って，「先生！」と呼んだが聞こえなかったらしく，もう一度，「先生！」と呼んだところ，ジロッと睨まれた。先生は極度の近視だったので，度のきつい眼鏡をかけておられた。その度のきつい眼鏡の奥から鋭い眼光でジロッと睨まれると結構凄味があり，「怖い先生」という印象をもった。先生は若い頃結核を患われたため，その薬の副作用で眼が悪くなり，耳も遠くなられたということ聞いたのは，随分後になってのことであった。

ゼ　ミ

当時のゼミは隔年開講であった。現在でも隔年開講が基本かも知れないが，当時は「すべて」と言っていいくらい隔年開講であった。だから，運が悪ければ，自分が希望するゼミを受講できないという可能性がでてくるわけだ。私の学年がそうだった。坂本先生は67年４月から関西大学に移られるということで，われわれがゼミを選択する時にはゼミ生を募集されなかったし，太田先生も前年度に開講されたので，われわれの年には開講されなかった。長田先生は開講されたが，二年次の文法の授業で辟易していたため，選択する気になれなかった。結局，不如意ながら文学のゼミを選択したが，もともと語学を勉強したかったわけだったので，熱が入らなかった。おまけにゼミ指導教授の饒舌さに耐えられなくなり，途中で投げ出してしまった。次年度はむろん太田ゼミは開講されたわけで，その幸運に浴したのは畏友日下恒夫君（現関西大学教授）である。当時，日下君は自称「太田先生の一番弟子」と自慢していたが，冗談半分にせよ，羨ましい思いで聞いていたものだった。太田先生に指導教授となっていただいたのは，修士に入学してから

のことである。

『欧陽海之歌』の“望”

中国の文化大革命が始まったのは，私が三年の時だった。姚文元の「評『海瑞罷官』」が『人民日報』に掲載されたのが，その始まりだった。そんな中で，当時の文化界を代表する郭沫若が，金敬邁の『欧陽海之歌』という小説を絶賛したことがきっかけとなり，『欧陽海之歌』という小説がベストセラーになった。太田辰夫先生は，前後三年間ほどこの小説を教科書に採用された。私が想像するに，恐らく先生は「ベストセラー」だから『欧陽海之歌』を選ばれたのではなく，作者の金敬邁が南京の出身だということで興味を覚えられ，教科書として採用されたのであろうと思う。

当時，“中央人民广播电台”で“长篇小说连播节目”という番組があり，代表的な，あるいは人気がある小説の朗読を放送していた。中国語放送の聞き取りに夢中になっていた私は，ちょうど『欧陽海之歌』が取り上げられていたので，タイミングよく２，３回の放送を録音できた。そこで朗読を聞きながら，何気なくテキストと比べていた。そうすると，朗読はテキストを結構変えていっているということに気が付いた。それで書き換えているとことを記入していたところ，非常に印象に残ったのが，原文の“望”を悉く“看”に変えていっていた点であった。「おかしいな，“望”と“看”では違うのになあ。なぜ，原文はこれほど多くの“望”を使っているのだろう？ひょっとしてこれは，方言じゃないか？」と思ったので，授業の折，“望”が出てきたところで，先生に「先生，この“望”というのは方言じゃないですか？」と質問した。例の如く，「難しいね。」，「困っちゃったねえ。」，「分からないんだよ。」と呟きつつ，マイペースで，楽しみながら，さっさと授業をされている先生だったが，その時は，はたと止まられ，暫し考えられた後，「ちょっと待って，調べてみるから。」とおっしゃった。次の週の授業で，太田先生は「この前の“望”ねぇ，あれやっぱり方言だったよ。」と付け加え

られた。私は「ああ，そうか，方言だったのか。」くらいにしか思わなかったが，先生の方はご自身で色々な資料を調べられ，納得された結果であろう。ところが私が驚いたのはその後のこと。『欧陽海之歌』はやたら“望”が出てくる。そのたびに，先生は一度立ち止まり，クックックと笑われ，「この“望”ねぇ，佐藤君に教わったのだけれどねえ，これ実は方言なんだよ。」と言われるのだった。それも三度ばかり繰り返されて。常に万全の準備をされて教場に臨んでいる太田先生にとって，一学生の，何気ない質問が，自身の予想を越えていたということが，よほどショックだったのではなかろうか。また学生の質問に対し，適当に誤魔化される先生もおられる中，これほどまで真剣に対応してくださる太田先生のお姿を見て，私は他の先生とは違うものを感じていた。「この先生は違う，この先生は本物だ。」と。太田先生の偉大さを徐々に感じるようになってきたのは，この頃からである。と同時に太田先生はどうやら，「この学生はできる。」と勘違いされたらしい。それが後になって分かった。

後日談―大学院受験

「“望”方言事件」（？）には後日談がある。このことがあって一年ばかり経った頃であったかと思うが，大学院の入試を受験した。出題される問題は，それぞれの先生の専門領域から出されるので，「ああ，この問題は太田先生の出題だな，ああ，これは長田先生の出題だな。」と分かる問題だった。太田先生が出された問題は，老舎の文章の一段を挙げられ，「次の文の，北京語を指摘せよ。」という内容であった。私は正直，面喰った。「学部修了くらいの学生に，何でこんなもん分かるんや？」と思ったが，誰に文句を言うわけにもいかず，他の問題を必死になって解いたが，「北京語問題」は何も書けなかったと記憶している。要するにその問題は０点だった。

面接の時，何時ものにこやかな表情を浮かべながら，太田先生が，「君，案外できないね。」と一言おっしゃった。太田先生のこの一言は，未だに忘

れられない。先生のこの一言から想像するに，例の「“望”方言事件」は，先生にとってよほどショックな出来事であったようで，「負うている子に浅瀬を教えられ」という心境でなかったかと思う。これがきっかけで「この学生はできる。」と勘違いされたらしい。私は当時，学部の学生であったから，先生のようにいろいろな資料を渉猟した上で「方言だ。」という結論を出したのではなく，ただ何となくそう直感しただけの話だった。ところが先生からすれば，先生と同様，こちらも十分調べ上げたうえで「“望”は方言じゃないですか？」という質問を発したと思われたのであろう。そこで院の入試でも腕によりをかけ出題されたに違いない。そこまで構えて出題したところ，見事に肩透かしをくらったわけだ。「君，案外できないね。」の一言には，そうした背景があったのだろうと想像している。

「ショウガク」

大学院に入ってから，ある時，太田ゼミの受講生に「今，太田ゼミでは何を読んでいるの？」と聞いたところ，「ショウガクです。」という返事が返ってきた。「小学？なんで太田先生が文字学をやっているのかな？」と不思議に思っていろいろ聞いてみたら，「ショウガク」という文字は「小学」ではなく，「小額」だという。私は初めて聞いた書名だったので，ゼミ生にどういう本なのか尋ねたが，要領を得なかった。そこで太田先生の研究室にお伺いし，直接お話をお伺いすることにした。先生のお話では，最近，学界に紹介された新しい資料で，『小額』という清末の小説だとのこと。「これがとっても面白いんだよ。」と，先生，実に楽しそうに語っておられた。そんなに面白いのなら，授業を受けたいと思い，お願いしたところ，二つ返事で許可がおりた。

ゼミは先生の研究室で行われていた。受講生は少なく，確か３名くらいだったと思う。私はすでに院生であったので，ゼミ生の先輩である。それかどうか分からないが，私は「特別扱い」を受け，先生の机に坐らせてもらっ

た。ゼミ生はソファーに座り，先生は別の椅子に腰掛けて授業された。

『小額』を講義されている太田先生は実に楽しそうだった。『小額』を読みながら，ニコニコして，「面白いねえ。」を連発される。こちらはそこまでの面白さが分からず，「難しいなあ。」と思いながら聞いていた。私が自分で『小額』を読んで，「面白い」と思えるようになったのは，それから15年くらい後のことだった。

“反骨”

『小額』で“反骨”という語がでてきたことがあった。太田先生は，「この後頭部のでっぱっている部分ね，この下に“反骨”という骨があってね，この“反骨”というのが大きいと，謀反を起こすって言われているのだよ。」と，ご自身の後頭部をさすりながら説明された。その直後，「僕，ないんだよ。」と真顔でおっしゃった時には，思わず笑ってしまった。「そりゃ，先生にはないだろう。」と内心思いつつ。

プリント

ゼミでは毎回のように詳細な語釈を付したプリントを配ってくださる。太田先生の授業はいつもそうだが，重要なこところは常にプリントを配布された。聞くところによるとご自宅に「ガリ版」印刷用の印刷機までお持ちだということであった。それをご自身で「カリカリ」と鉄筆でガリ切りをし，印刷までして大学まで持ってこられ配布される。それはゼミだけではなく，普段の授業でもそうだった。配布されたプリントを集めれば，相当の枚数になったであろう。そうした中で，私がいまだに重宝しているのが「“了”的用法」である。

また，『小額』を講義された時は，語釈以外に語彙索引も配布された。語彙索引はガリ版とは別の印刷の仕方であった。ここまで丁寧に授業されたのは，後にも先にも，太田先生だけだった。後に汲古書院から出版された『社

会小説 小額』は，こうしたプリントがベースになっている。

大学紛争

70年安保をひかえた69年，日本の大学で学園紛争が頻発した。小さな規模の本学であったが，他大学と同じように発生し，研究棟，学舎さらには図書館も封鎖された。

ある日，太田先生が研究棟の前で，運動に参加していた中国学科のある学生を見つけると，「卑怯者，覆面をとれ！」と，珍しく強い口調でその学生に迫っていった。件の学生はマフラーをしていたのだが，それを先生は覆面と勘違いされたのだ。運動に参加していた学生は，自分の顔が知られるとまずいので，おおむねタオルなどで鼻や口を隠していた。太田先生はその学生のマフラーを覆面だと思いこまれたわけだ。件の学生がマフラーを取ると，中国学科の学生で，しかも留年していた学生だと分かったので，先生は「何だ，君か！何をしているのだよ，何度も一年ばかりして！話があるのなら上に上がって来いよ！」と大変な剣幕でその学生を問い詰められたのだが，すぐ近くにいた私は先生のあまりの剣幕にたじろいでしまった。ところが件の学生は，全然動じることなく，しかも笑みを浮かべながら「先生が降りてきてください。」と言ってのけたのだ。私は横で「余計なこと言いよって，何と無礼なことを言うヤツ。あとどうなっても知らんぞ。」と思いつつ，ハラハラしながら聞いていた。すると，その一言で，太田先生の表情が狐につままれたようになり，一変した。そして，先生，一言，「君，頭いいねえ！」と。これには私が驚いた。あれだけ怒っていたのに，相手が気の利いたことを言った途端，表情が一変したのである。私はその思考の柔軟さに驚いたのだ。そこでまた，「この先生は違う。」という思いを強くした。

『平妖傳』との出会い

修士課程を修了したあとは大阪市大の博士課程で学び，博士課程を修了し

た時点で運よく助手に採用されたが，この間のことは端折る。ただ，この期間は，今から思えば試行錯誤の時期で，「シンドカッタ」ということしか思い出せない。

外大に赴任して数年経ったある年の夏，天理図書館から刊行されていた『三遂平妖傳』（いわゆる旧本）を入手し，太田辰夫先生からコピーさせていただいていた『天許齋批點北宋三遂平妖傳』（いわゆる新本）と重複する部分を，なにげなく比べて見ていた。その時，「これ，言葉が違うのじゃないか」と直観的に感じた。もちろん「何が違うか」は即座に分かったわけではない。そこで，「新本」と「旧本」の異なるところをコピーした「新本」に書きこんでいった。その作業を終え，新旧両本では，新本が“難道”を使っているのに，旧本では“終不成”を使い，“難道”は使わないというように，確かに使われている語が異なる。これは一体何だろう？何が原因でこうなっているのだろう？この違いを何かに応用できないか？そのようなことをぼんやり考えていた。

そんな時，以前から気になっていた『三言』のことをふと思い出した。周知の如く『三言』は各篇の成立時期を巡って，鄭振鐸はじめ数人の研究者が説を立てていた。しかし，時代判定をする際に，その根拠としていることが，どうにも納得できなかったのである。曰く「宋人の口吻である」，曰く「『大宋』とあるから宋代である」，曰く「この官職は宋代のものだからこの作品が宋代のものである」などなど，後世からいくらでも真似できそうなことを根拠にしていることが納得できなかったのである。

「この新旧『平妖傳』の言語の違いを使って，『三言』に応用できないか？馮夢龍が使った語をA類，使わなかった語をB類とした時，『三言』のうち，A類が集中する巻は馮夢龍が創作したか，もしくは彼の手の入れ方が多かった。それに対し，B類ばかりでA類がないのは，古い話本が存在し，馮夢龍の手がほとんど加わらなかったのでは？B類が多く，A類が少ない巻は，古い話本が存在し，馮夢龍の手の加わり方が少なかったのでは？」と

考えたのだ。そのような構想を，ある日，恐る恐る太田辰夫先生に話してみた。先生は暫く考えておられたが，「うん，正しいね。」と一言おっしゃってくださった。この言葉は，それ以降の私の研究にとって，何よりも大きな支えとなった。先生のこの言葉ほど励まされたことはなかった。その時，「そうか，指導教授の役目というのはこういうところにあるのか，こういう場合こそ指導教授は大事な存在なのだ。若い研究者が迷っている，こうすればどうか，こうすれば，こういう結果で出てくるのではないか，ああいう方法ならどうかと，一歩を踏み出せず迷っている時こそ，『この道を行きなさい。』と明確に指示してくれる，これこそ『指導』なのだ。」と思った。太田先生のこの一言がなければ，後々の「『三言』研究」も恐らく実を結んでいなかったと思う。それくらい，あの時の先生の一言は大きかった。

新旧『平妖傳』の比較を通じて10項目ほどのA類，B類を抽出した後，早速『古今小説』に応用してみた。思った通りの傾向が読みとれた。A類が偏る巻，B類が偏る巻がかなり鮮明に現れてきた。しかし，最終判断をする際，決定打に欠けるうらみがあったので，「これではダメだ。」と思い，もう一度新旧『平妖傳』の比較に戻ってみた。その結果，さらに20項目ほどのA類，B類を抽出できたので，『警世通言』に応用しようと思った。「しかし待てよ，新旧『平妖傳』以外に，まだ話本には『清平山堂話本』，『熊龍峯小説四種』もあるから，こういう話本類と『三言』とで共通する巻も比較する必要もあるな。そうすれば，新旧『平妖傳』とは違う結果が出てくるかも知れない。その両者を満足させる結果が出てくれば，立論の根拠がより強固になるはずだ」と思い，そちらを優先させた。その結果，『警世通言』を対象に調査した結果は，『古今小説』より遥かに手ごたえがあった。

『三言』に関する論文を書いていた時は実に楽しかった。時には，出てきた結果に昂奮して寝付けないこともあった。それまで「義務」で論文を書いていて，論文を書くのが苦痛でしかなかった自分が，初めて「論文を書くのが楽しい，研究が面白い。」と思えるようになった。今まで何も見えてこな

かったのが，自分が資料を収集し，分析し，検討してみると，今まで見えかなかったものが見えてくる，気がつかなかったことに気が付く，これは楽しい。

角川『中国語大辞典』

太田先生とお話していると，その一言一言に吃驚することをよく経験した。角川書店から，『中国語大辞典』が出版されて間もなくの頃の一言もその内の一つだ。その『大辞典』をぱらぱらめくっておられた先生が，一言おっしゃられた。「あっ，さっき僕が知らない語彙があったよ。メモしておけばよかった。」と。この一言を耳にし，私は唖然とした。「こんなに大きな辞書だから，自分が知らない語彙があるなんて，当たり前じゃないか。」と。しかし，太田先生の場合は，どうも前提が違うらしい。ひょっとしたら，「これくらいの辞書に取られている語彙なら，知っている。」というように思っておられたのかも知れない。でなければ，「あっ，さっき僕の知らない語彙があった。」というふうな言葉は出てこないだろう。

異体字の問題

『三言』における馮夢龍が創作した巻がどれかを追究することに夢中になっていた時，同時に気にかかり始めたのが，異体字の問題であった。

容與堂本『水滸傳』を読んでいた時，方位詞の“li”を表すのに“裏”と“里”と“裡”以外に“裡”という文字があることに気が付いた。“裡”という文字があることに気が付いたのだが，当初は「“裡”との違いは“、”が１つか２つかという些細な違いだから，大した問題じゃない。」と思っていた。ところが，よくよく見てみると，“裡”という表記は各回まんべんなく使われているが，“裡”は使われていない巻がある。これは一体どういうことか？という疑問が出てきた。「これは何かあるに違いない。」と直感的に感じた。しかし，「何かあるとしても，どう証明すればいい？」というのが次の

問題であった。そこでヒントとなったのが，レントゲンの断層写真である。当時，脳や内臓の断層写真というのがテレビで映し出されたり，あるいは新聞に写真が掲載されたりすることがあった。そういうものを見ると，「この部分が悪い」ということが明確に分かる。素人でも分かる。あれをこの異体字研究に応用できないか？具体的には，出版時期が比較的明確な資料を調査し，あの断層写真のように時代順に並べてみる。そうすれば，その異体字が出現した時期を特定できるのではないか？と考えた。しかし，それを証明するには，相当の分量の資料が必要だ。しかも，方位詞の“li”なんて，それこそ掃いて捨てるほど出てくるだろう。それを全部集めるのか？と考えるとゾッとした。そうすると，またもう一人の自分が囁く。「やってみろよ。できあがったら，説得性のあるものになるぞ。」と。

“ge”にしてもそうだ。“ge”には，“箇”，“个”，“個”の三種ある。“个”は現行の簡体字であるところから，新しい漢字と認識されていることが多いようであるが，実はすでに『説文解字』にある。『説文』にはむろん“箇”もある。ないのは“個”だけである。ということは，“個”の出現が遅かったに違いない。では，何時頃から使われ出したのか？そこで30種ほど，出版時期が明確な資料を調査し，上述の断層写真のように配列したところ，“個”という表記は，嘉靖頃から使われ始め，萬暦頃から普及したということが分かった。こういう調査をすれば，出版時期がはっきりしない資料でも，“li”や“ge”が，どの表記を用いているかによって，その資料の出版時期が推定できると考えたのである。

中国は，66年～76年の文化大革命によってほとんどの領域の研究が中断された。近世語の研究も同じことであった。しかし，改革開放の期間を経たあたりから，その様相は大きく変わりつつあった。86年，上海教育学院で開催された“第三届近代漢語研討会”に出席した折，出版されて間もない龍潜庵編著『宋元語言詞典』を手にした時，近世語研究が着実な歩みを始めたと感じた。90年，北京大学に招かれて院生に講義する機会を得たが，その時に優

秀な研究者が育ちつつあることを肌で感じた。「本国人が本格的な研究を始めれば，われわれ外国人は太刀打ちできなくなるだろう。本国人と太刀打ちするには，斬新な研究方法と独自の視点を持たねばならないだろう。」という感を強く持ったが，21世紀を迎え，その気持ちはますます強くなってきている。

※書いておきたい事は多々あるが，きりがないのでこのあたりで擱筆する。
　34年間お世話になった神戸外大に感謝しつつ。
　神戸外大の更なる発展を祈りつつ。